



Title	台湾における海外大衆文化の受容に関する研究：大学生の対日意識と対韓意識の比較を中心として
Author(s)	陳, 亭希
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47161
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	陳 亭 希
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 20613 号
学位授与年月日	平成 18 年 6 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	台湾における海外大衆文化の受容に関する研究—大学生の対日意識と対韓意識の比較を中心として—
論文審査委員	(主査) 教授 深澤 一幸 (副査) 教授 西口 光一 助教授 ヨコタ村上孝之

論文内容の要旨

日本から植民地支配を受けた経験のある台湾では、長年にわたり日本文化の流入が規制されてきた。その一方で、1993 年末のケーブルテレビ法の成立に伴い、様々な日本文化が許容されるようになり、台湾では日本ブームが次第に拡大した。1997 年、「哈日族」（ハーリーズ）という言葉が生まれ、広く使われるようになった。それ以降日本が好きな人を一般的に「哈日族」と呼ぶようになったが、その呼称を確固たるものとしたのは、台湾人漫画家の哈日杏子である。

哈日族が定着したのち、流行文化の関心の対象は韓国にも拡大した。2001 年以降韓国ドラマが急速に台湾を席卷し、2005 年現在では、韓国ブームは日本ブームにつぐサブカルチャーの主流となっている。哈日族と同様、韓国文化が好きな人を「哈韓族」（ハーハンズ）と呼ぶようになった。

従来から日本に対し「made in Japan=高品質」というイメージが根強いが、多くの台湾人は、韓国に対しては「キムチ、高麗人参」などのイメージしか持っていなかった。1997 年のバブル経済崩壊の時点で韓国の国民所得は台湾の国民所得の半分だったが、その後は急激な経済成長を遂げ、2004 年に初めて国民所得が台湾を越えた。2001 年以降、韓国ドラマの流入に伴い、「冬のソナタ」の「勇様」、「哈日族」につづく「哈韓族」という社会現象、サムソンの携帯電話や家電製品などが従来の韓国のイメージを一変させた。一方、2005 年、台湾では熱狂的な「哈韓」ブームを経て、韓国文化の流入に対する不安感も高まった。従来は台湾と同じレベルと見られていた韓国の格付けが、日本と同じレベルにまで上がってしまうことが懸念されたのである。つまり、「同等のライバル国」だった韓国が日本と同じ「格上の国」になってしまうことへの危機感が表面化し、経済・産業などの各分野で台湾は韓国に遅れをとっているという多くの記事により、その危機感は一層助長されていった社会的背景が存在する。

現在の台湾において、「哈日族」及び「哈韓族」現象に伴い、対日意識及び対韓意識も徐々に変化を遂げてきた。本研究は、こうした台湾における日本ブーム・韓国ブーム現象をさまざまな視点から考察し、共通点と相違点について検討しつつ、台湾人の対日意識と対韓意識を明らかにするものである。さらには本研究の試み、分析結果を通じ、日本・韓国と台湾の文化交流の参考資料として貢献できると考えるものである。

また、台湾の現在の若者における「哈日族」・「哈韓族」の現象を取り上げ、その実態を把握することを主たる研究目的とし、その中で、「哈日」と「哈韓」の共通点と相違点を考察・検討し、台湾人の対日意識と対韓意識を明らか

にしたい。従来の研究では、日本ブームを日本による文化植民地化、文化侵略などと捉える批判的なものがほとんどである。哈日族の若者の意識について、十分な検討が行われているとは言えず、日本文化への接触時期はいつか、日本文化の受容が彼らの考え方や価値観にも影響を与えているかどうか等についての研究はきわめて少ないものであった。

これに対し、筆者は台湾の学界に広まった哈日に対する批判的な視点を取り払い、新しい目でこの現象を捉え直すため、日本文化の受容を若者たちの主体的な選択結果とする肯定的観点を視野にいたした分析を試みた。

本研究では、先行研究の問題点から立てたテーマ、意識面・行動面でのテーマ、「哈日族」「哈韓族」に関するテーマについて、台湾の若者の全体的な傾向を把握した上で、男女差、本省人・外省人、日本語学科・非日本語学科などの属性差も考慮しつつ検討を進めて対日意識と対韓意識を明らかにした。研究方法は台湾の大学生を層化抽出法及び単純無作為抽出法を合わせた方法によって 563 人のサンプルを得ることができた。SPSS の統計方法で集計、解析を進め、その集計においては単純集計、解析方法は度数分布表、記述統計、t 検定、相関分析と仮説の検定を用いた。

台湾において、日本の事象は長期にわたって様々なジャンルで浸透しており、ケーブルテレビ法の成立で日本ドラマが爆発的に人気を呼んだのはブームの引き金に過ぎなかった。日本ブームはその始まった当時こそ一時的なものと予測されたが、すでに 10 年以上過ぎた現在も衰えることなく存在し続けている。そのことから、台湾における日本ブームは、単なるブームというよりすでに生活に浸透したものと見えるであろう。一方、韓国ブームはドラマが起爆剤となって突如始まったものであった。現在のところ、長い年月をかけて浸透してきた日本ブームに対し、韓国ブームは瞬間的、表面的な流行にとどまっている。

翻って、2005 年現在台湾は韓流で盛り上がり、日本ブームは終わったという通説も存在する。しかし、本研究で対日イメージと対韓イメージを比較分析した結果、これは、日本の大衆文化が生活に浸透し、ブームとして意識することがなくなってきたに過ぎないということがいえる。

まず、台湾の大学生にとって日本はファッション・流行の最先端の国であり、韓国は経済成長追及の国というイメージが見られた。また、台湾の若者は日本に対して高い関心を持っており、そこに顕著な男女差はないことが分かった。一方、韓国に対して関心を示した人は半数にとどまり、男女に顕著な差も見られた。また、日本に関心を持つ理由としては「日本の製品は質が高いから」「日本は環境が綺麗で治安がよいので、一度行ってみたいから」が最も高い評価を得られた。他方、韓国に関心を持つ理由としては「韓国のドラマがおもしろいから」という項目が最も高い評価を得られた。

さらに日本・韓国の製品・商品に対する評価については、日本の商品は品質が高い・値段が高い・デザインがいいという項目で高い評定値が得られており、韓国の商品に対する評価とは大きな差異があることが分かった。韓国の商品の人気が高まりつつある一方、日本の商品に対する信頼感が変わっていないという結果が得られた。

日本のもので興味をひかれるものとしては「流行・ファッション」「アニメ・漫画」「テレビ番組」など様々なジャンルが挙げられた。一方、韓国のもので興味を惹かれるものとしては対象が「テレビ番組」に偏っていることが分かった。また最も消費されている日本商品は、ファッション・服、漫画・ゲーム、さらには他の商品も偏りなく消費されている傾向が見られたが、韓国商品においてはドラマ、ファッションに消費の領域が限定されている傾向がみられた。

そのほか多くの人にとって、初めて日本の物事に接触した時期は小学校の頃、韓国の物事に接触した時期は高校以降ということが分かった。また日本の物事への接触のきっかけはアニメ・漫画からであり、韓国の物事への接触はドラマからというものであった。

日本の場合、興味を持つ番組としてはアニメが最も人気が高く、そのほか、料理番組、ドラマ、バラエティーなど人気は多様なジャンルにわたっている。一方、韓国の番組ではドラマのみが高い比率を示しており、日本のテレビ番組を見る理由としては、流行・ファッションに関心があるという理由が最も高い比率を示すものであった。また、日本の社会、文化も大学生にとって関心を持つ項目の一つとして挙げられた。さらに日本と韓国の共通点として、社会、文化の面も台湾の大学生にとって高い関心の対象であるという点が挙げられた。日常生活との関係については、全体的に日本の物事は韓国の物事より台湾の若者の考え方や価値観に影響を与え、日常生活に溢れ、欠かせないものになっているといえる。ここにおいて最も注目すべきは、日本の物事は台湾人のライフスタイルに徐々に影響を及ぼし、

すでに生活の中に定着したとほとんどの人が考えているという点であろう。つまり、日本文化は韓国文化に駆逐されたわけではなく、日常生活に定着し現存し続けていると考える。

また、ほとんどの一般人は日本・韓国の流行文化に対して文化植民地という考え方を持っていないが、日本文化に対して一部根強い警戒感を持っている人がいるという結果も得られた。一方、韓国ブームに対しては一様に寛容な態度を示していた。

そのことを踏まえ、日本ブーム現象と日本の植民地だったことの相関性の有無を明らかにするため、三項目の質問を被調査者に実施した。一点目として、日本に関心を持つのは昔台湾が日本の植民地だったことが理由であるかについて調査したが、相関関係は見られなかった。二点目として日本に関心を持つのは祖父母などの親族から日本の話を聞かされていたことが理由であるかについて調査したが、相関関係は見られなかった。三点目として、日本の植民地であったこととの関連については半数以上の人が否定的な意見を示していた。以上の質問結果から、日本ブームは台湾が植民地だったこととは相関関係がないという若者の意識が明らかになった。

「哈日族」と「哈韓族」については、「日本が好きの人」や「哈日族」は「韓国が好きの人」や「哈韓族」より多く、また「哈日族」と「哈韓族」に対する考え方としては、現在の若者は日本・韓国の大衆文化を受け入れる現在の流行を肯定的に捉えている。現在台湾の大学生は海外大衆文化の受容について、肯定的かつ積極的な考え方を持っているといえよう。

さらに本研究では、先行研究にもとづき、男女差、外省人・本省人の差、日本語学科・非日本語学科の差という3つの変数を仮説として立てた。その結果、3つの変数ともある程度の項目で統計的な有意差が見られた。

まず、日本ブームに対する男女差については、一部の項目を除き、全体的には決まった傾向があるわけではなく、男女差による肯定的受け入れにはっきりした差が見られなかった。本調査結果は、女性のほうが日本ブームに肯定的とする先行研究の記述と比べ極めて対照的であるといえよう。翻って、先行研究をみていると日本ドラマに関する項目を中心に分析がなされているものであった。筆者はこういった偏った分析が女性のほうが肯定的受容傾向にあるという結果に繋がる一因となったのではないかと考える。つまり本調査のように対象者への調査項目を日本に関する様々なものに広げてみた場合、顕著な男女差は見られないのではないかと考える。また、先行研究の調査した当時は日本ブームが始まったばかりであり、女性がブームを先導していたということも一因として考えられよう。また現在はブームが既に落ち着いているということもあり、そのことも本調査結果において男女差が小さくなった一要因として挙げられよう。

外省人・本省人という変数から見ると、外省人より本省人が積極的に日本語習得、留学の意欲を示しており、「日本は文化的、地理的に近く、よく交流しているから」という理由で日本に関心を持っている。日本の植民地だった台湾では「本省人は親日、外省人は反日」と言われているが、本研究からは「外省人は反日というほどではないが、本省人ほど親日ではない」ということが言える。また、日本語学科と非日本語学科の差が最も影響力の大きい変数であり、さらに日本語学習時間の長い日本語学科の学生は非日本語学科の学生より全体的に日本ブームに対して肯定的であることが分かった。

韓国ブームに対する見方においては、男女間に大きな差異があり、男性より女性のほうが韓国に対して肯定的に受け入れていた。他方、日本ブームに対する見方では男女差に大きな差異が見られなかった。また、韓国ブームに対し、外省人と本省人の間にはその見方に差異がないことが分かった。そのことは台湾と同じ日本の植民地だった韓国に対し、外省人と本省人の間で意識の違いはないということを示唆するものであった。また、韓国ブームに対しても「日本語学科と非日本語学科」は影響力の大きい変数であり、非日本語学科の学生より日本語学科の学生のほうが韓国ブームに対して否定的な見方をしていた。ここにおいて日本語学科の学生には、日本ブームは就職に有利という意識があり、新しく浸透してきた韓国ブームにはライバル意識を持っていることが推測できた。

本研究は、台湾における海外大衆文化の受容を日本ブーム、韓国ブーム現象と対日意識、対韓意識の比較を通して分析するものであったが、大学生を対象とした日韓ブームへの意識比較調査により、日本文化受容が肯定的かつ積極的な考え方にに基づき幅広く浸透していることが浮き彫りになった。

論文審査の結果の要旨

本論文は、主に大学生へのアンケートにより、かれらの対日意識と対韓意識を統計的に調査し、いまの台湾における日本ブームと韓国ブームの実態を明らかにしたものである。

本論文でまず評価すべきは、論文の基礎となる調査がとてもよく計画されたものだということである。調査の背景となる基礎資料、先行研究などへの目配りも行き届いており、方法的自覚も水準に達している。調査対象の選択も適切で、それは調査の母集団を台湾の大学生全員とし、層化抽出法および単純無作為抽出法によって標本を選定したことなどに表れている。まず、日本語学科の存在する大学を対象に台湾の大学を北部・中部・南部の三層に分け、その3つの層別に大学に番号をつけ、乱数表を使ってくじ引きの要領でそれぞれ一つの大学を抽出した。学科については、日本語学科とそれ以外の学科を分け、それ以外の学科から一つの学科を抽出したのである。そして予備調査も行ったうえでの本調査では、600人近くの学生を対象者としている。

また、本調査でのアンケートの内容も、先行研究を考慮したり、専門家にチェックしてもらったりして、適切なものとなっている。それは、先行研究の問題を独自の調査で修正しようという問題意識にもとづいたものとすらいえる。

このように確かな問題意識を持って周到に準備されたアンケート調査の結果は、現在の台湾の大学生の対日意識と対韓意識の実情をきわめて明らかに示しており、その分析から導きだされる、日本ブームは台湾人の生活に浸透し定着しているのに対し、韓国ブームは瞬間的・表面的な流行にとどまっているという本論文の結論を、きわめて説得力あるものに行っているのである。

以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものと認められる。